

# まなびじまの町立高校・奥尻高校の町立移管と高校魅力化

## ——地域主義的転回と地域学校協働の交点で起きていること——

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域主義的転回、町立移管、奥尻高等学校、地域学校協働、内発的

### 1 高度経済成長後社会の地域主義

「この島でしかできないことをしたい」、「何か普通じゃない体験がしたくてここに來ることにしました」これらの言葉は、最近、高校魅力化を行う高校に全国募集で入学した生徒の言葉である。高校生らしからぬ言葉であり、高校教育が変わる予感がする。

考察を進める前に、まずは五〇年前の若者をふりかえろう。一九七〇年代の若者はオートバイやヒッチハイク、そして国鉄（現JR）の周遊券を手に地方を旅した。東京オリンピックを経て大阪万博が行われた直後の一九七〇年一〇月に、国鉄のディスカバージャパンのキャンペーンが始まった。キャンペーンは国鉄が提供し、永六輔さんがルポする旅番組『遠くへ行きたい』とともに大ヒットした。『遠くへ行きた

い』の山口百恵が歌う主題歌には「巡り逢いたい」というフレーズが繰り返されたり、キャンペーンを企画した電通の藤岡和賀夫氏は同じ年に富士ゼロックスのキャンペーン「モーレッツからビューティフルへ」の企画も担当していることから、ディスカバージャパンは、高度経済成長を達成した日本が物質世界の充実から精神世界の充実へとステージを進めたことを象徴していると考えられている。ディスカバージャパンは日本と自分自身を再発見する企画であり、地方への旅を通して地域の暮らしを大切にすること、地域での人々の支え合いを大切にすることを思い出させるものだった。

若者を離れて当時の産業と社会を見ると、一九七〇年代半ばに、日本で初めて地域主義を唱えた経済学者のひとりである玉野井芳郎は経済合理的な人間像への疑問を訴え、産業主義から地域主義への転換を

主張した。同じ頃、E・F・シューマッハーが『スモールイズビューティフル』で大量消費や巨大科学振興を批判し、小規模な産業や中間技術(適正技術)の意義を説いた。

玉野井は経済学分野以外の研究者にも意欲的に働きかけ、研究は多様な分野の研究者に引き継がれた。しかし、学歴主義が根強い教育分野に限っては玉野井が期待を寄せていたほどには地域主義は広まりを見せなかった。

## 2 教育の地域主義的転回と高校魅力化

最近になって、一部の学校が地域社会からの要請を積極的に受入れ始め、「地域の特色を生かした教育」、「社会に開かれた教育課程」、「地域学校協働」、「地域コンソーシアム」など、地域のニーズや地域の教育力と協働するようになり、これに合わせて、徐々に教育の地域主義の動向が現れるようになった。われわれはこの動向を教育の地域主義的転回と呼ぶこととする。

私たち「地域人材育成研究会」は、高校魅力化型の高校改革を対象に、量的データと質的データを収集・分析し、文科省や総務省の政策および地元産業と社会からの要請がこれまで地域主義から距離を置いてきた高校教育をどのように変容させたかを考察してきた。『地域人材育成研究』は、収集した教育の地域主義的転回のデータをアーカイブすることが創刊当初の動機であった。

研究を始めてみると、高校魅力化は多様だし定義は曖昧であった。ここで高校魅力化型の改革の共通項を探すならば、なによりもまず文

字通り生徒が魅力を感じる高校を創ることを目標にしている。そして、それを実現する方法としての、県外生募集、高校連携型の公設学習塾の設置があり、さらに地域の特色を生かした教育、地域との協働、コーディネーター(地域学校協働活動推進員)の導入、地域コンソーシアムの設置などがあげられる。高校魅力化はこのように、「魅力」と「地域」がキーワードとなる改革である。

ディスカバージャパンに遅れることおよそ四〇年、二〇一一年開始の「島根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の第一ステージに参加したのは原八校であった。

原八校は統廃合の危機に瀕していた。

従来の学歴主義的な高校教育にもとづいた教育改革では生徒は集まらなかつたし、在校生の不登校や中退も起きていた。キャリア教育も空回りしがちであった。いずれの高校も学歴主義から脱却した高校教育の開発が喫緊の課題であった。

島根県の高校魅力化では、都市の高校が行うことが多い受験教育やグローバルイズムの教育の追求の中で見失われてきた地域の様々な価値を、魅力の要素とすることとなった。

地元出身の生徒と県外生の両者にとって魅力的でわかりやすい地方地域での高校生活、地域課題への問題意識にもとづいた内発的動機づけ、自己決定感に基づく押しつけない学習の動機づけ、郷土愛の深化、地域貢献意識や地域当事者意識の育成、地域課題解決型学習、将来のUターン準備教育、地域学校協働など、従来の受験体制下とは異なる取り組みが次々と開発された。

しかし、高校魅力化は定義や概念が明確でないだけでなく取り組みは多様である。隠岐島前高校を始めとした島根型の高校魅力化はあくまでも島根県の離島・中山間地域の事情を反映した改革である。

同じ島根県内でも地域の事情や高校の背景ごとに、改革の様相は異なっている。たとえば、島根県西部の隣接する津和野町と吉賀町では、高校魅力化の改革の様相は異なっている。

津和野高校は津和野町の城下町としての歴史やディスカバージャパンの頃の遺産で商人が多いという特徴や資源を生かした改革を行い、吉賀高校は吉賀町の有機農業と農業文化を背景とする特徴や資源を生かした改革を行っている。

今、高校教育や学校教育をめぐることは、様々な用語や原理が飛び交っている。「主体的、対話的で深い学び」「社会に開かれた教育課程」「チーム学校」、「地域学校協働」、「地域コンソーシアム」、「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」などである。いずれも重要な用語であるし、重要な原理である。

しかし、これらいわゆる上からの原理とは別の原理で、目の前の生徒や地域に向かい合いながら、教育改革に取り組んでいる高校がある。島根県の魅力化の高校やその他の意欲的な高校、そして今回訪問聞き取り調査を行った北海道奥尻高校は、内発的な性格の強い高校魅力化改革となっている。

### 3 北海道立奥尻高等学校から 町立の北海道奥尻高等学校へ



北海道奥尻高校は、奥尻島が農業と漁業と観光の島であること、後述する島チカラを持つていること、地元の官民を挙げた支援を受けていること、道立から町立に移管したこと、コーディネーターを配置していないこと、一学年一クラスが定員であること、(島根県の高校魅力化の原八校ですら四〇名定員の小規模校は吉賀高校の1校のみ)、複数の大学から支援を受けていること、などの特徴がある。

地域人材育成研究会は実践されている取り組みの素晴らしさはもちろんだが、それに加えて右に述べた特徴を考えて、今後の魅力化型高校改革のモデルになりうると考え、奥尻高校への訪問インタビューを行った。

奥尻高校の地域の特徴を生かした教育の一つ一つ、地域学校協働の取り組みの一つ一つ、そして全体としての教育観や高校教育改革観、地域と高校との連携の在り方、奥尻町の教育政策、教師間の関係の作り方、これらのいずれもが課題の多い地域で地域の課題に向かい合った取り組みであり、時代を先取りし他校のモデルとなり得るものである。また、日本の高校教育改革の方向を考えるモデルにもなり得るものである。

#### 4 奥尻島

奥尻高校は北海道の南西部の奥尻島の丘の上に位置する。

奥尻島は日本海に浮かぶ自然豊かな島で、海は透明度が高く「奥尻ブルー」の海である。九月上旬に訪問したとき、高校への坂道からは奥尻ブルーと北国の澄んだ青空が交わって遠い果てまで輝いていた。

高校生は、奥尻ブルーの海でスクーバダイビング(スキューバダイビング)の授業を受けることができる。

奥尻島へは空路なら函館空港から奥尻空港まで三〇分、フェリーなら江差港から奥尻港まで二時間半の距離であり、面積は一万四二九九<sup>km<sup>2</sup></sup>、周囲約八四<sup>km</sup>。人口は昭和三五年の七九〇八人をピークに減少して、平成三〇年六月一日現在で二四五七人である。

奥尻島は、過去に大きな災害を経験している。平成五年七月二日午後一〇時一七分に発生した北海道南西沖地震である。島内各地区で建物の倒壊、地割れ、陥没、崖くずれが発生した。さらに、地震発生直後に津波の第一波が押し寄せ、津波の最高到達高は三〇m近くであったとされている。

島民は復興に努め、平成一〇年三月には完全復興を宣言するに至っている。「島チカラ」のなせる技だと考えられている。

#### 5 奥尻高校の沿革

奥尻高校は、昭和五〇年(一九七五年)四月に一学年二学級の北海道江差高等学校奥尻分校として開校。その二年後の昭和五二年(一九七七年)に北海道奥尻高等学校となる。平成一四年には一学年一学級になった。

平成二八年(二〇一六年)に道立から町立に移管し、北海道奥尻高等学校となった。翌平成二九年(二〇一七年)からは全国募集を開始している(所在地域である檜山学区以外の上限は入学生の五〇%以内)。



町立移管の主たる目的は廃校化の回避であり、廃校化の危機に振り回されない高校教育の確立であった（町教委）。町立移管によって、それまで町から離れた「丘の上の」奥尻高校が町との距離を一気に縮めたとされる（高校教員）。

募集人員は、全日制課程普通科四〇名である。平成三二年度（二〇一九年度）の入学生徒数は三二名、うち、島内が一六名、島外が一五名であった。卒業後の進路状況は、平成二八年度は一四名中一〇名が進学、四名が就職。平成二九年度は一七名中一二名が進学、五名が就職。平成三〇年度は九名中七名が進学、二名が就職であった。

## 6 地域学校協働と特色のある教育

奥尻高校では、生徒が島民と協働で地域活性化に取り組み、生徒は地方創生を体験的・実践的に学んでいる。ここでは概略を記述し、詳細は本号収録の「報告③町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと（二）プログラムの意図と開発過程、内容」で紹介する。

奥尻高校は総合的な学習（総合的な探究）の時間を使って、以下の三つの取り組みを行っている。地方創生を高校生の目線で考えて探究する町おこしワークショップ、高校生が地域の課題と解決策をアピールする奥尻パブリシテイ、奥尻の魅力を再認識し環境保全を考え発信・表現するスクーバダイビングである。生徒は奥尻パブリシテイとスクーバダイビングのうち、いずれか一つを選択する。

## 町おこしワークショップ

テーマが年度ごとに変化するが、奥尻高校は昨年度と同じであることは後退であると考え（清水校長）。二〇一九年度は前年度から引き続き「観光」、「祭」、「海産物」、「農産物」、「自然エネルギー」、「防災」の六分野に関する町の専門家を招き地元産業の現状と課題を提示してもらい、生徒が解決策を考え提案する。さらに、新規テーマの開拓に挑戦している班もある。町の専門家は町役場の地域政策課を紹介を依頼する。生徒は、町の課題・解決策についてワークショップ形式で討議し、分析・整理した内容を町民に対してプレゼンする。協力する町民は、教員から電話があると随時、支援をしてくれるという。プレゼンを聞いた町の専門家同士が自分のグループの発表は良かったと自慢しあうという。

## 奥尻パブリシティ本部

毎年、活動は深化する。二〇一九年度の「奥尻パブリシティ本部」は、企画、web・リサーチ、ハンドアウト、広報の四つのチームに分かれて、島の課題に対して企画を立案し、町に施策提言を行うことを目標として活動を進めている。

## スクーバダイビング

震災からの復興の中で高校生の海への親しみを回復することを目的に始まったが、町立に移管後、地元の潜水器漁業者がインストラクターを積極的にかつて出ている。今では、奥尻高校の魅力の柱の一つに育っている。

## 7 地域学校協働と特色のある部活動

奥尻高校の部活動には地域学校協働を行う二つの部活動がある。オクシリイノベーション事業部（Okushiri Innovation Division以下OIID）とボランティア局である。

### OIID

部活動遠征費を集めるためのクラウドファンディングを行ったことから始まった部活動で、その後、Tシャツ販売や地酒のラベル作成など様々なことをして部活動遠征費を生み出している。

### ボランティア局

町民スキー大会と奥尻ムーンライトマラソンのボランティアスタッフとしての参加、各種募金活動、小学生の通学合宿「子どもナイト☆ミーティング」のサポートスタッフとしての参加、奥尻町総合文化祭でのチャリティ販売や募金活動など、地域での活動は多岐にわたっている。

※奥尻高校の取り組みは年々発展しているので、入学を考えている中学生と保護者のみなさんは令和二年度以降の取り組みについては直接問い合わせるか、ホームページ等の資料で確認していただきたい。

## 8 まなびじま奥尻プロジェクト

### Okushiri English Saloon

奥尻にいなから留学気分を味わう。英語が話せるようになる。対象は、

中学生・高校生・社会人。さまざまな話題について、自分の感想や考えなどを英語で話し合う。

二週間に一回の割合で、島の各所を巡回して実施。対象は、中学生、高校生、社会人で、希望する中学生、高校生には、終了後、補足の説明や英語学習の相談を受け付ける。

#### 数学寺子屋

数学の“補習”。ただし、考え方を中心に学び、数学の面白さを知って貰う。

#### Wifi二二ネー

ボランティア参加の都市の大学生の兄さん姉さん（二二ネー）とネットで交流する。大学受験に向けての勉強の仕方や、不安などを聞いてもらう。その中で、大学での生活の話も聞ける。さらに、大学生の視点をかりて奥尻高校での生活を考える。

#### 町おこしワークショップ

前述の町おこしワークショップは、島民との協働で行われており、まなびじま奥尻プロジェクトの柱の一つに位置づけられている。支援している町役場の職員はインタビュウの中でただ頼まれ仕事をしているだけでなく、どのくらい教えたらいのか、生徒の主体性をどのように考えたらいのかと教育の視点から生徒への接し方を考えていることが印象的である。

最後になったが、私たちの広い意味での研究仲間であり、多くの刺激をいただいている個人と研究グループの研究を紹介したい。一つは、

地方の高校における進路指導に於いて、大学進学は地域の人材を作ることすなわち将来のUターンが意識されていることを示した研究である（上地二〇一九）。もう一つは、北海道大学のグループによる研究であり、教育行政学の関心から奥尻高校を何度も訪問して町立移管の過程を詳細に分析し、道による支援と高校の自律との新しい関係性が期待できることを明らかにしている研究である（篠原・高嶋・大沼二〇一九、高嶋ほか二〇一九など）。

#### 〈引用・参考文献〉

- 遠藤尚秀、二〇一八、「わが国における地域経営論の萌芽—公共経営論の深化と地方分権改革—」『福知山公立大学研究紀要』（一）、五一—八七頁。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇一八、「人口減少社会と高校魅力化プロジェクト—地域人材育成の教育社会学—」明石書店。
- 樋田大二郎、二〇二〇、「地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化（特集 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介）」『地域人材育成研究』（二）、三四—三七頁。
- 樋田有一郎、二〇二〇、「愛媛県立三崎高等学校せんた九部生徒インタビュー（特集 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介）」『地域人材育成研究』（一）、六一—七三頁。
- 上地香杜、二〇一九、「地方からの大学進学における日常的な進路指導—教師と生徒の認識に着目して—」『日本高校教育学会年報』（二二六）、七一—八一頁
- Schumacher,E.F.・小島慶三・酒井懋（一九八六）『スモール・イズ・ビューティフル—人間中心の経済学—』講談社。
- 篠原岳司・高嶋真之・大沼春子、二〇一九、「都道府県立高等学校の学校設置者移管に関する研究、北海道奥尻高等学校を事例に」『北海道大学大学院教育学研究紀要』（二三五）、七七—一一頁。
- 高嶋真之・大沼春子・尹景慧・淡路佳奈実・川村睦月・杉谷真実・田宮弘貴・松

尾奈緒・篠原岳司、二〇一九、「北海道奥尻高等学校の町立化に伴う変化…  
教職員・生徒・地域住民へのインタビュー調査より」『公教育システム研究』  
(一八) 一一二七頁。

玉野井芳郎、一九七八、『エコノミーとエコロジー…広義の経済学への道』みす  
ず書房。

玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司、一九七八、『地域主義…新しい思潮への理論  
と実践の試み』学陽書房。

玉野井芳郎、一九七九、『地域主義の思想』農山漁村文化協会。